## ■ ２歳児さんのパパの声より…

私たちがひよこぐみに通い始めたのは、息子が2か月くらいの頃でした。私は息子が聞こえないということを受け入れることができず、どうにか聞こえるようになって欲しいと願っていました。しばらくはそんな不安な気持ちが続いていましたが、とにかく息子のことや、聞こえない世界のことをより多く知りたいと思い、ひよこぐみのグループ活動や保護者講座などに積極的に参加しました。そこで学んだ知識と、出会った多くの「ろう者」のおかで、私の不安な気持ちが次第に消えていきました。

中でも私が一番心を動かされたのは保護者講座の『マイノリティ体験』でした。複数のろう者の中に、手話を学び始めたばかりの私がたった一人で参加し、会話をするという体験をとおして、会話についていけないもどかしさや、話に加わりたいのに加われない、なんとも言えない切ない気持ちになりました。さらにその講座に協力者として参加していたろうのママさんから「あなたの息子さんは、社会に出た時に、今あなたが感じたのと同じ気持ちになるのよ。」という話をきき、息子の成長のために、本気で努力しようと心に決めました。

それまでは目先のことにしか意識が向いていませんでしたが、息子の将来にも目が向くようになり、私の中である理想が生まれました。それは聴者の家族が音声で会話をするように、家族みんなで手話も使って会話することです。言葉に表すと一見シンプルなことかもしれませんが、それを実現させるのは簡単なことではないと思います。なぜなら、私は聴者で息子はろう者だからです。しかし、いつの日か、息子と口(手話)ゲンカをしてみたいし、男同士の相談にものってあげたい。そんな未来を想像して、今も手話の勉強を続けています。

最初は様々な身の周りの情報を私から息子へ伝えるだけでしたが、だんだん息子が自分の気づきを私に伝えてくれるようになり、 親子のコミュニケーションへとつなげることができるようになりました。最近では、私が習ってきた手話表現を息子が覚え、場面に応じて使いこなしてしまうこともあり、その成長には驚きが隠せません。このように家族でのやりとりができるようになったのは、やはり息子と日中一緒に過ごすことが多い妻のおかげだと感謝しています。そして、家族で毎日やりとりを積み重ねてきたことが実を結んできているのだと感じています。

息子が生まれたばかりの頃は、何をするにも手探りの状態でしたが、様々な出会いと助けがあり、新しい扉を開けることができた…そんなふうに思うのです。